

ガレノス Galen 『全集 Opera omnia』

坂井 建雄

順天堂大学保健医療学部

ガレノス Galen (129-216) は、古代ギリシャ・ローマにおける最も偉大な医師である。小アジアのペルガモンで生まれ、帝国の首都ローマに出て活躍し、動物の詳細な解剖を行って、医学全般(人体、病気、医薬など)にわたって多数の著作を著した。中世からルネサンス期にガレノスは医師の君主とみなされ、その著作は権威あるものとして尊敬を集めた。ガレノスの著作はギリシャ語で書かれ、中世・ルネサンス期にラテン語に訳され、15世紀末から17世紀にかけて『全集』が繰り返し出版された。

ガレノスの著作

ガレノスの『全集』で標準版として広く用いられているのは、19世紀初頭にドイツの医師キューンが編纂した全集(1821-33)¹⁾である。キューン版『全集』はA5判(高さ21cm)で全19巻21冊(および索引)からなり、総頁数は20026頁、各冊平均910頁である。私の所蔵本はホルムス社による複製版(1997)である。ガレノスの著作が内容にしたがって配列されており、12のカテゴリーに分けることができる。

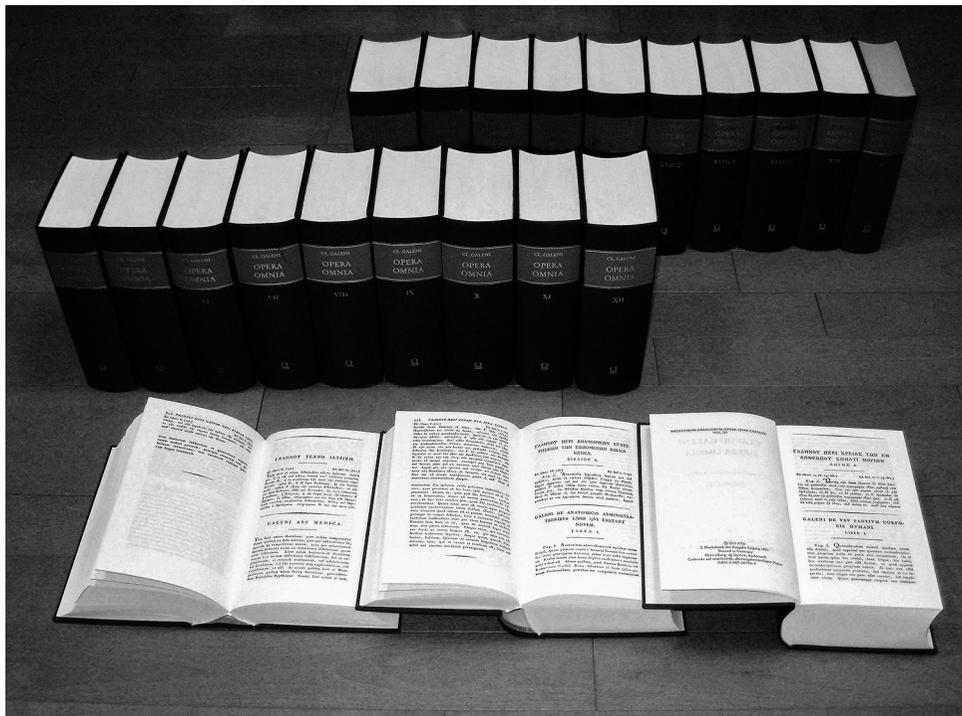


図1 『ガレノス全集』キューン版(1821-33)。複製，坂井建雄蔵。

1) 医学一般：医学全般とその学習法に関するもの

『医学の勧め』、『最良の学説について』、『最良の医師は哲学者でもあること』、『初心者のために諸学派について』、『最良の学派について』、『医術』、『経験学派の概要』、『医学の経験について』、『直接的原因について』

2) 自然学：医学理論の基礎として自然界と人体に共通する物質的基盤（元素，4基本性質，体液）

『ヒポクラテスによる元素について』2巻、『混合について』3巻、『自然の諸能力について』3巻

3) 解剖学：人体の代わりとしてサル解剖

『解剖手技』15巻*1、『初心者のために骨について』、『静脈と動脈の解剖について』、『神経の解剖について』、『嗅覚器について』、『子宮の解剖について』、『身体諸部分の用途について』17巻、『初心者のために筋の解剖について』

4) 生理学：筋の運動，呼吸，発生，霊魂，脈拍など

『筋の運動について』、『呼吸の原因について』、『呼吸の有用性について』、『胚種について』2巻、『胎児の形成について』、『自然状態において動脈に血液は含まれているか』、『我々の身体之最良の構成』、『良い習慣について』、『霊魂の能力は身体の混合に依存すること』、『霊魂の疾患を知り治療すること』、『霊魂の不全を知り治療すること』、『黒胆汁について』、『脈の用途について』、『ヒポクラテスとプラトンの学説について』9巻

5) 養生法：健康を保持し，完全な健康を回復する方法

『保健は医学と運動のどちらか』、『小球を使う運動』、『養生法について』6巻、『食物の諸力について』3巻、『大麦スープについて』、『痩せる食餌について』

6) 疾患学：疾患と症状の理論的な考察

『疾患の種類について』、『疾患の原因について』、『症状の種類について』、『症状の原因について』3巻、『熱病の種類について』2巻、『疾患の経過について』、『震・動悸・痙攣・硬直について』、『麻痺状態について』、『反自然的な腫瘍について』、『不均衡な状態について』、『呼吸困難について』3巻、『疾患部位について』6巻

7) 徴候学：疾患や症状の診断に役立つ身体の変化

『初心者のために脈について』、『脈の種類について』4巻、『脈の診断について』4巻、『脈の原因について』4巻、『脈による予後について』、『発作について』3巻、『分利の日について』3巻

8) 治療学：治療の方法，植物薬と瀉血

『治療法について』14巻、『グラウコン宛の治療法について』2巻、『瀉血についてエラシストラトスへの反論』、『瀉血についてローマのエラシストラトス派への反論』、『瀉血による治療の理論』

9) 薬剤学：植物薬を中心とした単純医薬，複合医薬の調剤法

『単純医薬の混合と諸能力について』11巻、『部位による複合医薬について』10巻、『種類による複合医薬について』7巻、『解毒剤について』2巻、『ピソ宛のテリアカについて』2巻

10) 注解・反論：ヒポクラテスの著作への注解など

『ヒポクラテスの「人間の自然性について」注解』、『ヒポクラテスの「急性病の食餌法について」注解』4巻、『ヒポクラテスの「体液について」注解』3巻、『ヒポクラテスの「予言について」注解』3巻、『ヒポクラテスの「流行病」注解』16巻、『ヒポクラテスの「箴言」注解』7巻、『リュコスへの反論』、『ユリアヌスへの反論』、『ヒポクラテスの「関節について」注解』4巻、『ヒポクラテスの「予後」注解』3巻、『ヒポクラテスの「骨折について」注解』3巻、『ヒポクラテスの「診療所において」注解』3巻

11) 自伝：ガレノスの生涯に関わるもの

『自著について』、『自著の順序について』、『自分の意見について』、『苦痛の回避』*2

12) 偽作：ガレノスの影響を受けて書かれた著作

*1 『解剖手技』第9巻途中以後はアラビア語訳で現存，キューン版に含まれない。

*2 『苦痛の回避』は2005年に再発見，キューン版に含まれない。

ガレノスの膨大な著作の中で、現存するものはほとんどラテン語に訳されている。近代語訳で読むことができる重要な著作を以下に紹介する。

『医術 *Ars medica*』は、ガレノスの医学の集大成にあたり、晩年（ローマの大火 192 年以後）に書かれた。残された手稿数、出版数、翻訳数から見て、最も多く読まれた著作でもある。ギリシャ語原典と対訳になった最近の英語訳（2016）²⁾とフランス語訳（2018）³⁾で読むことができる。序論に続いて、理論と定義（1-2 節）で医学の知識を①健康、②疾患、③中立の 3 種類に区分する。徴候の総論（3-5 節）と各論（6-22 節）、原因の総論（23-25 節）では必然的な原因として 6 つの非自然的物（大気、運動と休養、睡眠と覚醒、飲食物、排出物、霊魂の擾乱）を挙げ、健康の原因（第 26-37 節）について述べる。

『自然の諸能力について *De naturalibus facultatibus*』3 巻は、第 2 次ローマ滞在の早い時期（169-176 年）に書かれ、ガレノスの医学・生理学の基礎となるものである。4 元素と混合の理論を発展させて、血液・胆汁・粘液・黒胆汁という 4 種類の体液が 2 組 4 種類の組合せからできること、それらの過不足から病気が生じることを論じている。ギリシャ語原典と英語訳の対訳（1916）⁴⁾と日本語訳（1998）⁵⁾で読むことができる。

『身体諸部分の用途について *De usu partium*』17 巻はガレノスの解剖学の主著で、あらゆる器官に果たすべき役割があることを述べている。第 1 巻は第 1 次ローマ滞在期（162-166 年）に、残りの巻は第 2 次ローマ滞在の早期（169-176）に書かれた。四肢（第 1-3 巻）、腹部の栄養の器官（第 4-5 巻）、胸部の精気の器官（第 6-7 巻）、脳と頭部の器官（第 8-11 巻）、背部（第 12-13 巻）、生殖器（第 14-15 巻）、脈管と結語（第 16-17 巻）を扱っている。英語訳（1968）⁶⁾と第 1-3 巻の日本語訳（2016）⁷⁾で読むことができる。

『解剖手技 *De anatomicis administrationibus*』15 巻は、『身体諸部分の用途』の配列に準じて解剖の方法を述べている。第 2 次ローマ滞在期（169-192 年）に書かれたが、第 12-15 巻がローマの大火（192）で失われ書き直された。第 1 巻から第 9 巻

の冒頭までがギリシャ語原典で現存し、残りの部分はアラビア語訳で伝えられている。英語訳（1956, 1962）^{8,9)}で読むことができる。また骨、静脈と動脈、神経、筋の解剖についての各論的著作を日本語訳（2011）¹⁰⁾で読むことができる。

『養生法について *De sanitate tuenda*』6 巻は、健康を保持する方法について論じている。第 2 次ローマ滞在の 175 年以降に書かれた。理論的な考察、養生法（過剰物の排出、マッサージ、運動、ボディケア、入浴）、疲労の種類、体液の異常に加えて、年齢別の養生法（0-14 歳、14-21 歳、高齢者）を述べている。ギリシャ語原典付きの英語訳（2018）¹¹⁾で読むことができる。

『治療法について *De methodo medendi*』14 巻は、病気を治療する方法について述べている。第 1-6 巻は 169-176 年に、第 7-14 巻は 190 年代後半に書かれた。第 1-2 巻は理論について、第 3-6 巻は連続性の破断による疾患、第 7-12 巻は 4 基本性質の不均衡による疾患と熱病、第 13-14 巻は異常な腫脹による疾患について述べる。ギリシャ語原典付きの英語訳（2011）¹²⁾で読むことができる。関連の深い著作に疾患と症状の種類と原因についての 4 著作 6 巻があり、英語訳（2006）¹³⁾がある。

『自著について *De libris propriis*』はガレノスの生涯と著作について最重要の情報源で、晩年に書かれた。日本語訳（1997）¹⁴⁾がある。

ガレノスの著作の伝承

ローマ帝国の滅亡後にもなお、エジプトのアレクサンドリアではガレノスの医学に基づいた教育が行われていた。ガレノスの 16 点の著作を集めた著作集が編まれて「十六書」と呼ばれ、医学教育の教材として重視されていた。それを要約して追加説明を加えた『アレクサンドリア集成』という著作群が 6 世紀ないしそれ以後に編まれ、アラビアに伝えられて医学教育にも広く用いられた。アラビア語写本として伝存している。

『アレクサンドリア集成』に含まれるガレノスの著作

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ① 『学派について初心者のために』 ② 『医術』 ③ 『脈拍について初心者のために』 ④ 『グラウコンへの治療法について』 ⑤ 『ヒポクラテスによる元素について』 ⑥ 『自然の能力について』 ⑦ 『混合について』 ⑧ 『骨について初心者のために』、『筋の解剖について初心者のために』、『神経の解剖について』、『静脈と動脈の解剖について』 ⑨ 『熱病の差異について』 | <ul style="list-style-type: none"> ⑩ 『分利について』 ⑪ 『疾患の種類について』、『疾患の原因について』、『症状の種類について』、『症状の原因について』 ⑫ 『疾患部位について』 ⑬ 『脈拍の種類について』、『脈拍の診断について』、『脈拍の原因について』、『脈拍の予後について』 ⑭ 『分利の日について』 ⑮ 『治療法について』 ⑯ 『養生法について』 |
|--|--|

中東のアラビア地域では、バグダードを中心としたアッバース朝において文化が発展した。この頃にギリシャ語で書かれた医学書がシリア語やアラビア語に多数翻訳され、それらを元に臨床の知見も加えて新たな著作が数多く編まれた。

フナイン・ブン・イスハーク（ラテン名：ヨハニティウス；809-873）は、アッバース朝の時代のネストリウス派のキリスト教徒で、息子や甥などの協力者とともにギリシャ語の著作を、キリスト教徒のためにはシリア語に、イスラム教徒のためにはアラビア語に翻訳した。ガレノスの著作については医学一般、自然学、解剖学、生理学、疾患学、徴候学、治療学の重要な著作が含まれている。とくに『解剖手技』15巻のうち第9巻の後半以降の部分はギリシャ語原典が失われて、フナインらによるアラビア語訳からその内容を知ることができる。またフナインは『アレクサンドリア集成』をもとにして医学教育の入門書として『医学問答集』を執筆し、甥のフバイシュの追補により全10章として完成された。アラビア語圏で医学の入門書として広く用いられた。

11世紀から南イタリアでコンスタンティヌス・アフ리카ヌス（?-1098/99）が、また12世紀からスペインのトレドでクレモナのゲラルドゥス（1114-1187）が、ギリシャ・ローマの医学書をアラビア語からつぎつぎとラテン語に翻訳してヨーロッパ

に紹介した。ガレノスの著作では、『医術』、『混合』、『治療の方法』が訳された。南イタリアのサレルノ医学校で、11世紀末までに医学教材集『アルティチェラ Articella』が成立したが、ガレノスの『医術』はその中核となる7編の文書に含まれ、その後のヨーロッパの大学医学部でも広く読まれた。ガレノスの『身体諸部分の用途について』17巻では、前半部分に対応する『器官の用途』10巻が不完全なアラビア語訳から12世紀にラテン語に訳された。14世紀初頭にはニコロ・ダ・レッジョ（c1280-c1350）によるギリシャ語原典からの訳が現れて置き換えられた。

その後古代ギリシャ・ローマの医学書は、ギリシャ語からラテン語に翻訳されるようになった。その最初期の翻訳者として著名なのはピサのブルグンディオ（1110-1194）で、ガレノスの『諸学派について』、『養生法について』6巻、『熱病の差異について』、『脈の差異について』を訳している。ニコロ・ダ・レッジョ（c1280-c1350）は1308～1345年にかけて多数の医学書を翻訳した。ヒポクラテスの『箴言』、『予後』、『急性病患者の摂生法』を訳し、またガレノスの著作のうち医学一般に関するものでは『初心者のために諸学派について』、『最良の学派について』、『経験学派の概要』、『直接的原因について』、解剖学では『子宮の解剖について』、生理学では『身体諸部分の用途に

ついて』17巻、『呼吸の原因について』、『呼吸の役割について』、『胚種について』2巻、『我々の身体の最良の構成』、『良好な体調』、『靈魂の能力は身体の混合に依存すること』、『養生法では『痩せる食餌について』、『疾患学では『反自然的な腫瘤について』、『呼吸困難について』、『治療学では『グラウコン宛の治療法について』、『瀉血による治療法』、『部位による複合医薬について』10巻、など多岐にわたっている。

15世紀後半に印刷技術によって書物が印刷・出版できるようになると、医師や人文学者たちによってギリシャ語原典が精力的に探求され、新たなラテン語訳や古い翻訳の改善が行われた。イタリアのレオニチェノ（1428–1524）は、ガレノスの『医術』、『自然の能力について』、『ヒポクラテスの「箴言」注解』、『ヒポクラテスによる元素について』、『筋の運動について』、『グラウコン宛の治療法について』等を訳している。オランダのエラスムス（1467–1536）は高名な人文学者で、ガレノスの医学書では『最良の教えについて』、『医学のすすめ』、『最良の医師は哲学者でもあること』を訳している。イギリスの医師リナクル（1460–1524）は、『自然の能力について』、『混合について』、『不規則で悪い混合』、『養生法について』、『症状の原因について』、『症状の相違について』、『治療の方法』などを訳している。ドイツの医師フックス（1501–1566）はチュービンゲン大学の教授で、『疾患の原因について』、『疾患の差異について』、『症状の原因について』、『症状の差異について』、『熱病の差異について』、『瀉血による治療法』、『分利について』などを訳している。ドイツのアンデルナハ出身のギュンター（1505–1574）はパリの医学部で医学の教授を務め、とくに解剖生理学に関する『解剖手技』、『ヒポクラテスとプラトンの教説』、『自然状態において動脈に血液は含まれているか』などが著名で、医学一般に関する『最良の学派について』、『病気に関する『分利の日について』、『不自然な腫脹について』、『医薬に関する『一般的な複合医薬』、『場所による複合医薬』、『解毒剤について』など多数の著作を訳している。

ガレノス全集の出版

ヨーロッパの大学で医師の教育に用いられる教材は、15世紀末から印刷・出版されて広く用いられるようになった。サレルノ医学校で編まれた教材集の『アルティチェラ』と、アヴィケンナの『医学典範』のラテン語訳は、1470年代から繰り返し出版された。古代ギリシャ・ローマの医学書も、ラテン語に訳されて出版されるようになった。ガレノスの医学書のラテン語訳は個別の著作として、数編を含んだ著作集として、あるいは『アルティチェラ』の一部として、1473年から1599年までの間に少なくとも611編が出版されている¹⁵⁾。

ガレノスの著作を網羅した全集は、これまで25回出版されている。そのうちギリシャ語原典としては3回出版されており、1525年のアルドゥス版はその後のガレノス著作の研究が発展する契機となった。ラテン語訳の全集は1490年にヴェネツィアで2巻本として初めて出され、1533年まで7回出版された。1541–2年のジュンタ版はその当時に得られる最善の原典をもとに新たなラテン語訳を含めてガレノス全集を大きく拡張し、この新しい水準で1563年まで9回出版された。その後1565年から1625年までヴェネツィアのジュンタが7巻と補遺を加えた全集を6回出版している。1821–33年に出版されたキューン版は、ギリシャ語原典とラテン語訳が併記されてガレノス著作集の標準的な版としてよく用いられている。

出版年	出版地	出版社	判型	冊数
1473	Strasbourg	Adolf Rusch	fol	5
1473	Milan	per P. de Lavagnia	fol	3 (in 2)
1476	Padua	impr. Joannis Herbort	fol	1
1479	Padua	Johannes Herbort, de Seligenstadt	fol	1
1482-83	Venice	Petrus Maufer, Nicolaus de Contugo et Socii	fol	1
1486	Venice	Petrus Maufer et Socii	4to	1
1489-90	Venice	per D. Bertochum	fol	2
1490	Venice	Octavianus Scotus	fol	1
1495	Venice	Baptista de Tortis	fol	1
1500	Venice	Impressum per Simonem Papiensem dictum Bivilaquam	4to	1
1505	Venice	Impressus mandato & impensis heredum Octaviani Scoti	4to	1
1507	Venice	Paganinus de Paganinis	4to	1
1510-12	Pavia	Jacob de Burgofranco	fol	1
1520-22	Venice	Cura heredum Octaviani Scoti	fol	4
1522	Lyon	opera Jacobi Myt	4to	1
1527	Venice	In edibus Luce Antonii Junta	fol	1
1544	Venice	Apud Juntas	fol	1
1555	Venice	Apud Juntas	fol	1
1556	Basel	Per Joannes Hervagios	fol	1
1562	Venice	Apud Juntas	fol	1
1564	Venice	Apud Vincentium Valgrisium	fol	2
1582	Venice	Apud Juntas	fol	1
1595	Venice	Apud Juntas	fol	2 (+1)
1608	Venice	Apud Juntas	fol	2 (+1)

私の所蔵本はラテン語訳のガレノス全集で、ヴェネツィアのジュンタから1625年に出版された¹⁶⁾。ベージュ色のベラム（子牛皮紙）で装丁されたフォリオ判（高さ36cm）で大型の5巻本である。最初の3巻は本文7群を収録し、第1巻（第1群：341葉，第2群：109葉），第2巻（第3群：266葉，第4群：220葉），第3巻（第5群：277葉，第6群：21葉，第7群：322葉）である。第4巻には補遺（ガレノスの伝記，各著作の要約），著作断片（16編，44葉），入門編（15編，72葉），偽書（35編，126葉），番外編（4著作，79葉）を含む。第5巻は索引（548葉）である。各群の内容は以下の通りである。

- ・第1群：自然学，解剖学，生理学に関する27著作，『混合について』3巻，『解剖手技』9巻（15

巻中），『身体諸部分の用途』17巻，『ヒポクラテスとプラトンの学説』9巻，『自然の諸能力について』3巻を含む。

- ・第2群：養生法に関する12著作，『食物の諸力について』3巻，『養生法について』6巻を含む。
- ・第3群：疾患と症状に関する18著作，『疾患の種類について』，『疾患の原因について』，『症状の醜類について』，『症状の原因について』3巻，『熱病の種類について』2巻，『呼吸困難について』3巻を含む。
- ・第4群：診断と徴候に関する13著作，『疾患部位について』6巻，『脈の種類について』4巻，『脈の診断について』4巻，『脈の原因について』4巻，『脈の予後について』3巻，『分利について』3巻，『分利の日について』3巻，『ヒポクラ

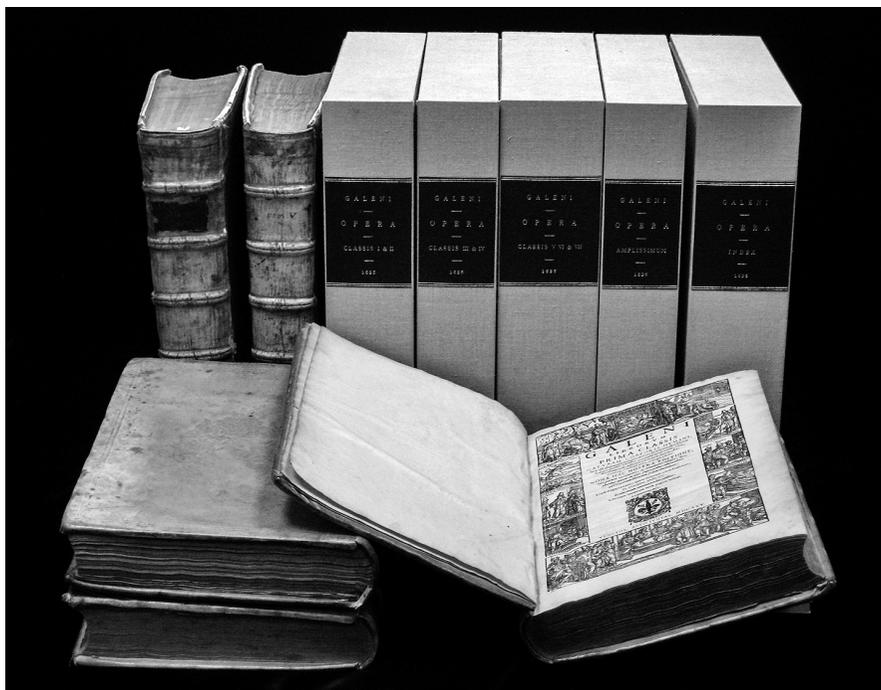


図2 『ガレノス全集』(1625). 坂井建雄蔵.

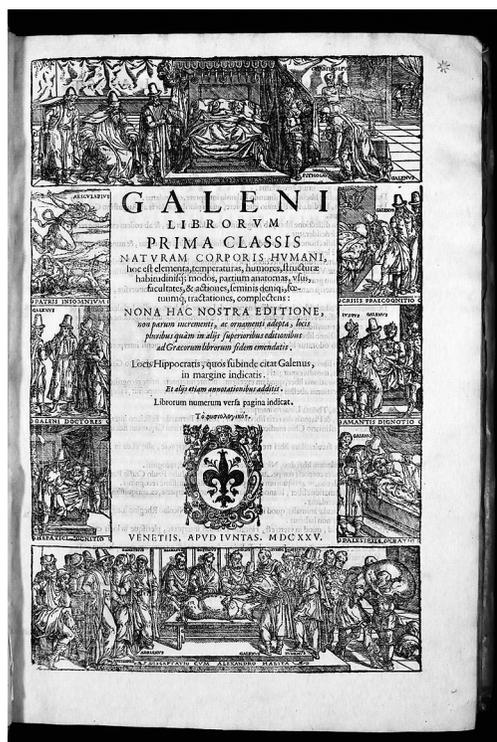


図3 『ガレノス全集』(1625), 扉. 坂井建雄蔵.

テスの「子後」注解』3巻を含む。

- ・第5群：医薬に関する9著作、『単純医薬の混合と諸能力について』11巻、『解毒剤について』2巻、『部位による複合医薬について』10巻、『種類による複合医薬について』7巻を含む。
- ・第6群：瀉血に関する5著作。
- ・第7群：治療法に関する17著作、『治療法について』14巻、『グラウコン宛の治療法について』2巻、『ヒポクラテスの「急性病の食餌法について」注解』4巻、『ヒポクラテスの「診療所において」注解』3巻、『ヒポクラテスの「骨折について」注解』3巻、『ヒポクラテスの「関節について」注解』4巻を含む。



図4 『ガレノス全集』(1625), 第1巻の目次と第1頁『ヒポクラテスによる元素について』冒頭。坂井建雄蔵。

ガレノスの生涯

ガレノスについては、石碑や墓碑など同時代の資料で言及がなく、生涯について語られた古代の文書もなく、ガレノス自身の著作に含まれる伝記的な記述から再構成されてきた。『自著について』、『自著の順序について』などの他に、2005年に再発見された『苦痛の回避』が有力な資料となっており、新しい伝記が英語で書かれ、日本語訳で読むことができる¹⁷⁾。

ガレノスは、129年に小アジア西北部のペルガモン(現在のトルコのペルガマ)に建築家ニコンの一人息子として生まれた。幼少時から裕福なエリートとしてギリシャ語の教育を受け、父親から数学と幾何学を学んだ。14歳の頃からストア派とプラトン派の哲学を学んだ。17歳の頃、父親が夢で見た神のお告げにより、医学をサテュルスに学ぶようになった。しかし19歳の頃に父親が亡くなり、20歳の頃からペルガモンを離れて、スミルナでペロプスに、コリントスでスミシアスに

学び、さらに2年間ほどアレクサンドリアで解剖学とヒポクラテス文書について専門家から学んだ。28歳の頃にペルガモンに帰り、4年間ほど剣闘士の医師を務めた。32歳の頃にペルガモンを離れ、おそらくリュキア(現在のトルコ南部)、シリア、キプロスなどを数ヶ月旅行し、ローマに到着した。

ローマでは4年間にわたって公開での討論と動物解剖示説を行い、自然学と解剖学などについていくつか著作を著した(第1次ローマ滞在、162-166)。しかし37歳の頃にローマを疫病が襲い、ガレノスはペルガモンに帰郷した。しかしその2年後にマルクス・アウレリウス帝に呼ばれてドイツ遠征軍に加わったが、翌年に軍役を解かれてローマに戻り、皇子のコンモドゥスの侍医となった。

ガレノスはその後ローマに滞在し(第2次ローマ滞在、169~)、もはや公開での討論や解剖示説をやめて多数の著作を行い、また皇帝を含めローマのエリートたちから庇護を受けるようになった。192年のローマの大火では、平和の神殿に保

管してあった著作が焼失するという不運に見舞われたが、長命で晩年まで著述を行ったと考えられる。

ガレノスの影響と名声

ガレノスの著作は、その後の医学に圧倒的な影響を及ぼした。18世紀に至るまでの西洋伝統医学では、ガレノスの医学は権威として君臨し、その著作から学ぶことが医学の教育であり研究であり続けた。権威に対する厳しい批判もしばしば巻き起こった。このようにガレノスの医学は18世紀までの西洋医学そのものであり続けたが、人物としてのガレノスが注目されることは驚くほどに少なかった。医史学者テムキンはこういった状況に気づいてガレノスの後世への影響を研究し、『ガレニズム』(1973)¹⁸⁾を著している。

12世紀以後にガレノスの医学文書がつつぎとラテン語に翻訳され、ラテン語訳のガレノス全集が1490年から繰り返し出版され、1625年まで22版が確認できる。ガレノス全集のギリシャ語原典版は1525年と1538年に出版された。18世紀までの西洋伝統医学において医学の教育・研究の中心は、ガレノスの医学文書を解釈して診断・治療に役立terることであった。19世紀初頭にギリシャ語とラテン語対訳のキューン版全集が出版されたのも、医療に役立terることが目的であった(Nutton, 2002)¹⁹⁾。ここまでガレノスとその医学は、その時代の医学に役立つ同時代的な存在であり、医史学研究的対象となる歴史上の存在ではなかった。

ガレノスの医学文書の医史学的な研究と近代語訳は、ダランベールによるフランス語訳(1854–56)²⁰⁾から始まる。『身体諸部分の用途について』17巻、『自然の諸能力について』3巻、『疾患部位』6巻、『グラウコンによる治療法』2巻などが含まれている。20世紀に入って重要ないくつかの著作の近代語訳、『自然の諸能力について』の英語訳(1916)、『解剖手技』の前半の英語訳(1956)と後半の英語訳(1962)、『諸部分の用途について』の英語訳(1968)などが登場した。20世紀末に英語訳によるガレノス著作選集(1997)²¹⁾が出た頃からガレノスの医学書の研究が急速に進展した。ガ

レノスの重要な著作について近代語訳がいくつも出されるようになり、ギリシャ語校訂版との対訳版が2011年以降にロエブの古典叢書から、2000年以降にフランス大学叢書から次々と出版されている。

このようにガレノスの医学の内容が明らかになってくるとともに、18世紀以前の西洋伝統医学に及ぼしたガレノスの影響も明らかにされてきた。

- ・ガレノスの医学を集大成したアヴィケンナの『医学典範』は、ルネサンス期のイタリアの大学で広く用いられた(Siraisi, 1987)²²⁾。
- ・サレルノ医学校ではヒポクラテスやガレノスの文書を含む『アルティチェラ』が編まれて16世紀まで医学教材集としてよく用いられ(坂井, 2015)²³⁾、ガリオポントゥスは伝存するガレノスの医学文書をもとに最初の医学実地書『受難録』を編んだ(Glaze, 2005)²⁴⁾。
- ・医学実地書は内容(ガレノスの医学文書に依拠する)と構成(部位別の疾患を頭から足へ、全身性の熱病)を保持しながら18世紀まで多くの著者により編まれ続け(坂井, 2015)²⁵⁾、18世紀後半にはソヴァージュの創案した疾病分類学に再編成された(坂井, 2010)²⁶⁾。
- ・大学で教えられる医学は14世紀頃から理論と実地に分離した(Siraisi, 2001)²⁷⁾。医学理論書の嚆矢となるフェルネルの『医学』(1554, 改題して『普遍医学』)の内容はガレノスの自然学に依拠しており(Forrester, 2003)²⁸⁾、ゼネルトの『医学教程5書』(1611)などその後の医学理論書はその内容を引き継いで5部門に分かれていた(坂井, 2013)²⁹⁾。
- ・18世紀以前にヨーロッパの大学では、医学が4教科に分けて教えられていた(坂井, 2019)³⁰⁾。
 - ①医学理論は5つの部門に分かれ(I. 生理学, II. 病理学, III. 徴候学, IV. 健康学, V. 治療学)、ガレノスの理論を基礎として教えていた。
 - ②医学実地は局所性の疾患(頭から足まで順に)と全身性の熱病を扱い、ガレノスの著作に基づいて診断・治療を教えていた。
 - ③解剖学/外科学はガレノスの解剖学から出発して、16世紀のヴェサリウスから人体を研究対象とするよ

うになった。④植物学／薬剤学はディオスコリデスの薬草誌とガレノスの医薬書から出発して、植物園での栽培や実用的な薬局方が作成された。

19世紀に入ると医学の構造と内容は大きく変化して、人体と病気について科学的探究を行う諸学科が生まれて基礎医学を形成し、病気の治療を行う臨床医学も諸診療科に分化した(坂井, 2019)³¹⁾。こうして西洋近代医学が誕生するまで、ガレノスの医学は西洋医学の教育・研究の中心であり続けたのである。

文献

- 1) Galen; Kühn CG (ed). *Klaudiou Galenou hapanta Claudii Galeni opera omnia*. 20 vols in 22. Lipsiae: Cnoblochii; 1821–1833.
- 2) Galen; Johnston I (tr). *On the constitution of the art of medicine; The art of medicine; A method of medicine to Glaucon*. Cambridge: Harvard University Press; 2016.
- 3) Galen; Boudon V (tr). *Galien tome II, Exhortation à l'étude de la médecine; Art médical*. Paris: Les Belles Lettres; 2018.
- 4) Galen; Brock AJ (tr). *On the natural faculties*. Cambridge: Harvard University Press; 1916.
- 5) 種山恭子 (訳). *ガレノス 自然の機能について*. 京都大学学術出版会; 1998.
- 6) Galen; May MT (tr). *On the usefulness of the parts of the body*. In 2 vols. Ithaca: Cornell University Press; 1968.
- 7) 坂井建雄, 池田黎太郎, 澤井直 (訳). *ガレノス 身体諸部分の用途について 1*. 京都大学学術出版会; 2016.
- 8) Galen; Singer C (tr). *On anatomical procedures*. London: Oxford University Press; 1956.
- 9) Galen; Duckworth WLH. *On anatomical procedures, the later books*. Cambridge University Press; 1962.
- 10) 坂井建雄, 池田黎太郎, 澤井直 (訳). *ガレノス 解剖学論集*. 京都大学学術出版会; 2011.
- 11) Galen; Jonston I (tr). *Hygiene; Thrasylbulus; On exercise with a small ball*. In 2 vols. Cambridge: Harvard University Press; 2018.
- 12) Galen; Jonston I (tr). *Method of medicine*. In 3 vols. Cambridge: Harvard University Press; 2011.
- 13) Galen; Jonston I (tr). *On diseases and symptoms*. Cambridge University Press; 2006.
- 14) 土屋睦廣. *ガレノスの自己文献解題『自著について』一序論・翻訳・訳注*. 明治薬科大学研究紀要〔人文科学・社会科学〕1997; 28: 31–60.
- 15) Durling RJ: *A chronological census of Renaissance editions and translations of Galen*. *J Warburg Courtauld Inst.* 1961; 24: 230–302.
- 16) Galen: *Galen Opera ex nona Juntarum editione*. VII. Antonii Musae Brasavoli, ... *Index refertissimus in omnes Galeni libros qui ex nona Juntarum editione extant, in quam indicem eorum operum inclusimus quae postremo ad nos pervenere*. Venetiis: apud Juntas; 1625.
- 17) マターン, 澤井直 (訳). *ガレノス: 西洋医学を支配したローマ帝国の医師*. 白水社; 2017.
- 18) Temkin O. *Galenism: rise and decline of a medical philosophy*. Ithaca: Cornell University Press; 1973.
- 19) Nutton V. *In defence of Kühn*. In: *The unknown Galen* (Nutton, V ed). Institute of Classical Studies, School of Advanced Study, University of London; 2002. pp. 1–7.
- 20) Galen; Daremberg C. *Oeuvres anatomiques, physiologiques et médicales de Galien*. Paris: Baillière; 1854–1856.
- 21) Galen; Singer PN (tr). *Selected works*. Oxford: Oxford University Press; 1997.
- 22) Siraisi N. *Avicenna in Renaissance Italy: the Canon and medical teaching in Italian universities after 1500*. Princeton University Press; 1987.
- 23) 坂井建雄. *サレルノ医学校—その歴史とヨーロッパの医学教育における意義*. *日本医史学雑誌* 2015; 61(1): 39–407.
- 24) Glaze FE. *Galen refashioned: Gariopontus in the later middle ages and renaissance*. In: Furdell EL, editor. *Textual healing—essays on medieval and early modern medicine*. Leiden: Brill; 2005. pp. 53–75.
- 25) 坂井建雄. *18世紀以前ヨーロッパにおける医学実地書の系譜*. *日本医史学雑誌* 2015; 61(3): 235–253.
- 26) 坂井建雄. *ソヴァージュ (1706–1767) の疾病分類学*. *医譚* 2010; 108: 109–123.
- 27) Siraisi N. *Medicine and the Italian universities 1250–1600*. Leiden: Brill; 2001.
- 28) Forrester JM. *The physiologia of Jean Fernel (1567)*. Philadelphia: American Philosophical Society; 2003.
- 29) 坂井建雄, 澤井直. *ゼンネルト (1572–1637) の生涯と業績*. *日本医史学雑誌* 2013; 59(4): 487–502.
- 30) 坂井建雄. *ヨーロッパの医学教育史〈1〉十八世紀以前の西洋伝統医学教育*. In: 坂井建雄 (編) *医学教育の歴史—古今と東西*. 法政大学出版局. 2019 Mar. pp. 5–54.
- 31) 坂井建雄. *ヨーロッパの医学教育史〈2〉十九世紀以後の西洋近代医学の成立と特徴*. 坂井建雄編. *医学教育の歴史—古今と東西*. 法政大学出版局. 2019 Mar. pp. 55–140.